

8. 白山神社と寒水の掛踊にみる歴史的風致

(1) はじめに

郡上市明宝の寒水白山神社は、郡上市明宝の西部にある寒水^{かのみず}に位置する。八幡町から国道 472 号（せせらぎ街道）を 12km ほど北上し、主要地方道白鳥明宝線を西に進むと明宝寒水地区がある。南北 6km の带状の山村集落である【2-8-1】。山中の村ではあるが、峠を介して東西の幾筋もの道を通じ、他者との経済や文化の交流があった地域である。寒水は、奥地より集落として開発が進み栄えたとする伝承があり、現在も地番にその名残があり、奥ほど数字が若く、下へ下るほど数字が大きくなっている。近年までは、峠を通して郡上市明宝^{けら}気良、同市白鳥町^{ろくのり}六ノ里地区、同市大和町^{ふるみち}古道、神路、同市八幡町^{かじか}河鹿など行き来が盛んであった。とはいえ、山深い地域であることには変わりなく、かつては炭焼きを中心とする山仕事の片手間に自家用の耕作をするという生活であった。

この地域の掛踊^{かけおどり}は、9 月第 2 土・日曜日に試楽と本楽が行われ、両日とも屋号中桁^{なかけた}の和田家の庭から打ち出しをして、白山神社に奉納されるが、明治末期までは、神社から北北西およそ 4km の大洞峠^{だいどう}に位置する奥の宮観音堂にも奉納された。市内にはほかにも掛踊はみられるが、寒水の掛踊を除いて、隔年ないし不定期に奉納されるため、寒水地区のように定期的に継続して行われていない。このことが大きく評価されて、国の重要無形民俗文化財に指定され、そしてユネスコ無形文化遺産「風流踊^{ふうりゅうおどり}」の 1 つとして登録された。

(2) 建造物

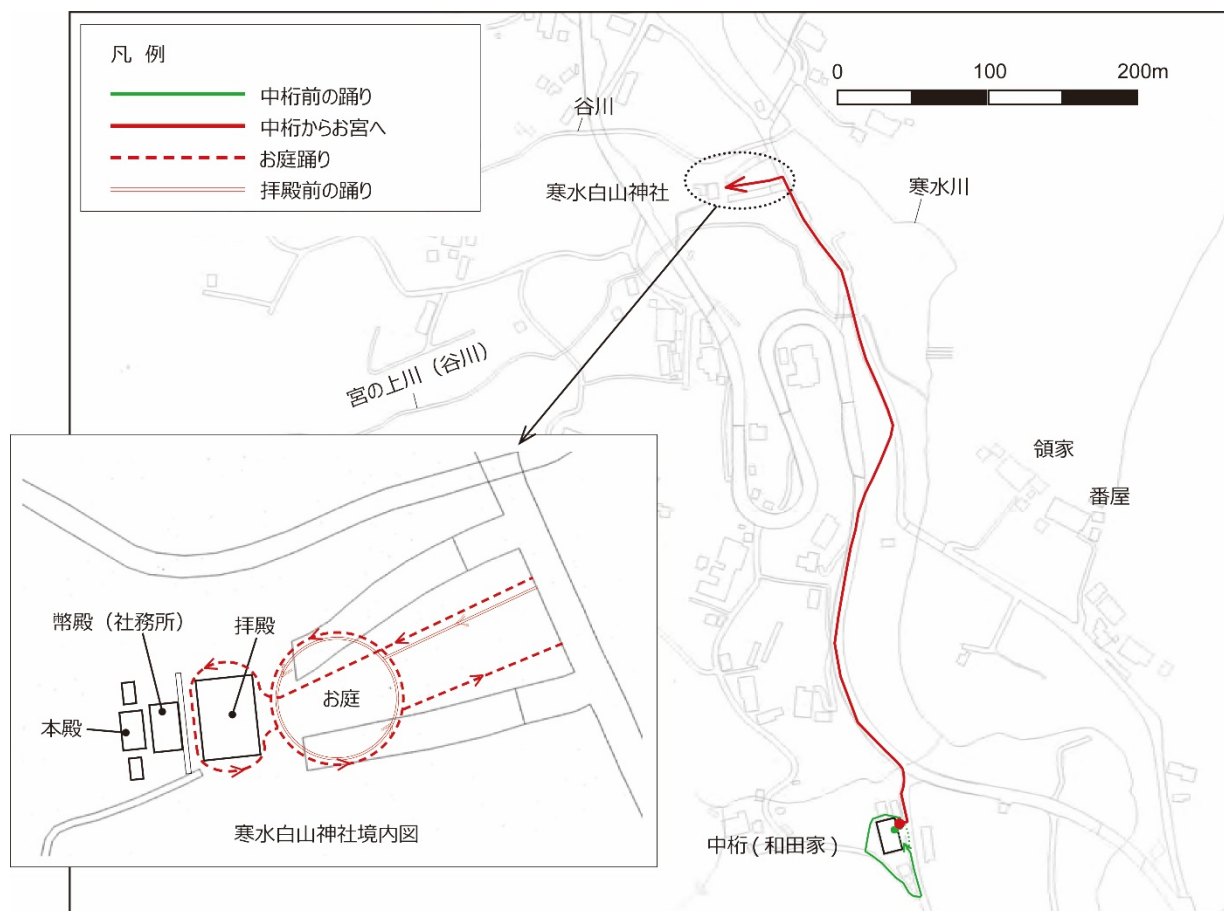
1) 寒水白山神社

・寒水白山神社の石造狛犬【市重要文化財（彫刻）】

白山神社は、明治 26 年（1893）以降の増田家の記録とされる『家頭記寺組』によると、「文正戊元年八月建立、惣氏子中」とあることから、文正元年（1466）創立とされている。また、神社南方に位置する浄土真宗金龍山^{ほんこうじ}本光寺が元白山天台宗道場修善坊という、当社の別当寺だった。祭神は、菊理媛神^{くくりひめのかみ}、伊弉諾神^{いざなぎのかみ}、伊弉冉神^{いざなみのかみ}で、白山大権現として木造聖観音座像^{もくぞうしやうかんのんざざう}を祀ってきた。寛文 13 年（1673）に当社に、天神社、宮ヶ洞社、若宮社、西の洞口社、村上社、馬塞谷社の村内の六社が合祀された。

白山神社境内は、杉木立の中、石造の鳥居をくぐると参道が続く。一對の石灯籠（昭和 13 年（1938））の先には、拝殿の前庭があり、お庭という。庭は、掛踊の奉納場所である。参道の両側は、休みどころという役者の休憩場所である。拝殿の奥、石積み上部に幣殿（社務所）と本殿が石造の瑞垣に囲まれて建っている。

拝殿は、安永 2 年（1773）の「郡上領留記」（大西文書）に桁行 5 間梁間 3 間と記述があり、入母屋造平入金属板葺である【2-8-2】。本殿は、一間社流造、切妻平入、金属板葺、向拝がついており、寒水自治会で保存している「覚」や「定」、神社に残る棟札で、安永 9 年（1780）に再建されたとわかる【2-8-3】。本殿と拝殿の間にある幣殿は、桁行 3 間梁間 2 間、入母屋造平入金属板葺である【2-8-4】。寒水白山神社の周辺にある社叢は、市天然記念物に指定されている。



2-8-1 寒水白山神社 位置図



2-8-2 拝殿



2-8-3 本殿



2-8-4 石積と幣殿 (社務所)

2) 中桁^{なかけた}（和田家）

神楽を打ち出す屋号中桁の和田家【2-8-5】は、吉田川の支流寒水川右岸にある。伝承によると掛踊が伝えられた当初は屋号田代の島崎家という旧家から打ち出していたが、田代が退出したため、永く庄屋をつとめた屋号尾会津^{おがいつ}の和田家に一時移り、いつのころからか不明であるが中桁にかわったという。現在、祭礼の起点となる場所となっており、試楽・本楽のいずれも、各役者の集合・打ち出し行事・祭りの行列の出発は、「中桁」と決まっている。



2-8-5 屋号中桁の和田家

建築年代についての詳細は不明であるが、少なくとも昭和 30 年代・40 年代の写真には中桁家での打ち出し風景が残されており、昭和 30 年代以降は建物が変わらず残っていることから、少なくとも 50 年以上は建物が変わることなく、残されていることが確認できる。

3) 観音堂

・奥ノ宮（観音堂）の石造狛犬【市重要文化財（彫刻）】

寒水字奥ノ宮にある観音堂【2-8-6】は、棟札に「気心藤入三力坊、貞享四年丁卯三月吉日」とあり、宝永 6 年（1709）の奉納札には栃洞村（現郡上市白鳥町六ノ里栃洞）から観音像をむかえた際に、奥の宮という祠が存在していたことがわかる。拝殿は、観音堂の谷向かいに庭園とともにあったといわれるが、いずれかの失火によって消失しており、その後の足跡をたどることができない。現在は、祭神や御神体を祀る祠と、享保 17 年（1732）、宝暦 3 年（1753）に建立された石灯籠と文政 9 年（1826）の石造狛犬一対がある。



2-8-6 奥の宮（観音堂）

祭事である十一面観音菩薩像は、初御神酒や祭礼の際に白山神社へお出ましになり御逗留という形をとる。その際に立ち寄りの宿によるかどうか、いつまで滞在するか、誰が背負ってお供をするかなどを禰宜^{ねぎ}が神にお伺いをして、くじの意向に沿って禰宜と祝^{ほろり}は行動することになる。

（3）活動

1) 寒水の掛踊【国の重要無形民俗文化財】

寒水白山神社の例祭は、昭和 37 年（1962）に「寒水の掛踊」として県重要無形民俗文化財に指定され、同 49 年（1974）には国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」となった。ついで、令和 3 年（2021）に国の重要無形民俗文化財に指定され、令和 4 年（2022）には郡上踊と同じくユネスコ無形文化遺産「風流踊^{ふうりゅうおどり}」の 1 つとして登録された。

しかし、コロナ禍で令和2年（2020）及び同3年（2021）は祭礼を中止し、神事のみ執り行われたが、令和4年（2022）には役者を地区の人に限定したうえで、通常開催がなされた。そして、令和5年（2023）はユネスコ無形文化遺産に登録されて初めての開催となり、後述する巡行後の寒水白山神社境内で、認定記念のセレモニーが行われた。そこでは、自治会長及び寒水掛踊保存会長の挨拶【2-8-7】、郡上市長らの来賓の挨拶、そして、ユネスコ無形文化遺産の認定証等が田打ち（子供の役者）によって披露された【2-8-8】。



2-8-7 保存会長（左）と自治会長（右）



2-8-8 セレモニーで披露されたユネスコ無形文化遺産登録証等

①踊りの起源と区長日誌

寒水の掛踊の起源は、宝永6年（1709）大和の母袋村（現在郡上市大和町栗^{くり}巢）から移譲されたという伝承がある。近世期の史料には、天明元年（1781）「当村白山大権現祭礼之覚」があり、すでに現在の掛踊の基本役な役者構成は成立していたとみることができる。文政初頭のもものとされる役者名簿の「寒水村踊行烈役者」などがある。本楽は、寛政7年（1795）の「祭礼之覚」では八月朔日とあり、明治初期までは旧暦八朔であった。明治末期には9月8日、9日に変更し、現在では9月第2土・日曜日に行われる。加えて、網火・筒花火13本、参詣700人程、街の細物売り、餅売り、酒、菓子売りなどの記載があり、盛大に行われていたことがわかる。

また、寒水自治会の倉庫には、代々の区長（現自治会長）が日々寒水で起こった出来事や会合で協議した内容、決定事項などを書き綴った『区長日誌』が、昭和5年（1930）から平成7年（1995）までの66年分を12冊の冊子で残されている【2-8-9】。その中には掛踊に関する記述も散見され



2-8-9 区長日誌

れており、66年の中で42年分が試楽・本楽に関する記述があり、全体の6割を占めている。ただ、昭和20～30年代の記述は、ごく僅かの4か年分にとどまる。また、雨による順延が9か年ほどあり、1日が雨で日延びした記述もある。また、大学他研究機関らの来訪についての記載があり、文化財指定等の調査状況をうかがい知ることができる。また、昭和44年（1969）の寒水の掛踊を行っている最中に地震が発生し、一時は騒然としたが、しばらくしてから笛・太鼓が鳴り出して行列を行い、平常通りに終わったという記載がある。これは、当時奥明方村（現郡上市明宝）を震源とする岐阜県中部地震（マグニチュード6.6）であり、同村内の畑佐や二間手地区などでは、家屋の倒壊、神社の鳥居や狛犬、墓などの転倒が相次ぐなど甚大な被害が出ていた。

②試楽・本楽

試楽と本楽は、昭和 30 年代からは同じ衣装で行われている。現在は寒水伝承館（元々、神社の下手にあった公民館）で準備が行われ、屋号中桁の和田家で修祓と打出しから、「中桁前の踊り」に入り、旧道を巡行後、白山神社前で「お庭踊り」と「拝殿前の踊り」を行う。本楽のみ、村の外から招いた神官と献幣使を交えた「シカンマツリ（祠官祭り）」が執り行われ、祭礼の最後に「どじょ」（盆踊りの 1 つ）を踊る。祭礼に際しては、奥の宮から十一面観音菩薩像を禰宜が背負って神社へお迎えをし、掛踊が終わると奥の宮に帰られる【2-8-10】。



2-8-10 観音様のお迎え（昭和 40 年代）

③中桁打ち出し

当日は、朝に屋号中桁の和田家おりだい こかねひきに折太鼓や鉦かね引がシナイや太鼓等を運び込み、屋内で座して、鉦・太鼓の試奏を開始する。これを「ヨビダイコ」または「ヨセダイコ」と呼び、鉦引と折太鼓と調子を取りつつ、4 名が一体となった演奏を行う。正午ごろ役者が屋号中桁の和田家に集合し、屋内での打ち出し行事を行う。打ち出しが終わると、屋内に集まった役者連中は、裏口から屋外に出て、屋号中桁の和田家の北西詰め付近に列を作り集合をする。

打出しの拍子打ちは、紙製蝶冠をかぶり、白帯で背中にシナイを、腹に太鼓をつける。一行は総勢 130 人ほどの構成となる【2-8-11】。背に負うシナイは、樽型の桶に長さ 3.6m の竹 8 本に造花を飾り、上幅 55cm、下幅 25cm となるように仕組む【2-8-12】。

打ち出しの行列は、屋号中桁の和田家の北詰めの坂を登り、いったん敷地の外に出て、裏手の道から東側へ進む【2-8-13】。なお、屋号中桁和田家から外へ出る際は、役者は勝手口から出るようにしている。これは、不浄（ケガレ）の空間を中桁家に留まらせないように、屋号中桁の和田家を一廻りするように行列をするという。そして、再び当家の敷地内へ入場する【2-8-14】。

2-8-11 掛踊 役内訳

悪魔払い 1	長刀振り 1	地歌頭 2
露払い 2	折太鼓打ち 3	踊り子 16
禰宜 1	鉦引き 1	花笠 12
鍵取り 1	笛吹き 14	おかめの舞 2
御供 1	鯨摺り 8	大傘持ち 1
音頭取り 2	田打ち 15	踊り幟持ち 4
出花持ち 2	大黒舞 2	吹流し持ち 1
神幟持ち 1	大奴 7	



2-8-12 折太鼓（前に太鼓、後ろにシナイ）



2-8-13 屋号中桁の和田家の裏の坂を登る行列



2-8-14 屋号中桁の和田家の裏を回り、表に入り輪をつくる

④中桁前の踊り

中桁前の踊りは、祭礼当日に3度奉納される掛踊の皮切りとなるもので、後で白山神社に奉納されるものとは違い、シナイを地面に打ち付ける拍子打ちの踊りの動作は行わず、歌に合わせて廻ることもしない。十六拍子、七つ拍子、三つ拍子と続き、歌頭が「すってんでんしこ」の拍子を打つ。中桁前の踊りは歌を伴う。拍子打ちが打ち上げ拍子を2回繰り返して中桁前の踊りは終わる【2-8-15】。



2-8-15 中桁前の踊り（昭和40年頃）

⑤巡行

中桁からおよそ800m先の白山神社に向けて、神社までの巡行では、道行曲の「しゃげり」で出立する。行列は、7種の笛と拍子を、笛吹の世話役が「ハンニャー」の呼び声を合図に、次々と曲目をかえて進んでいく【2-8-16】。

巡行は、寒水川に沿って南北に長い山間の集落の中で行われ、寒水川の支流の谷川や、田畑の間に家屋が点在する中を進んでいく。中桁より白山神社までは登りとなっており、現在の道路より低い位置にある旧道の「神様道」へ一旦降りて、130人ほどの一行は一列で北進する。寒水川に流れ込む2本の谷川に挟まれた位置に建つ白山神社に向かっていく。



2-8-16 巡行の様子（昭和40年頃）

⑥お庭踊り

神社の鳥居をくぐり、参道を進むと【2-8-17】、「こしずめ」で庭の右側を通り、拝殿の背後、社務所との間を通過し、本殿を拝しながら左側から庭に出て【2-8-18】、「七つ拍子」「三つ拍子」で輪を作っていき、「十六拍子」と続いて、お庭踊りが始まる。

拍子打ちの世話役が、長さ 3.6m、先が三又の竹を用いてシナイの先端を井桁に組む【2-8-19】。拍子頭の合図とともに「てんつくて」を打出し、お庭踊りに入る。拍子打ちの振りは大きくなり、中心に向かってシナイを左右に振り、腰をかがめて地面につくほどしなわせる【2-8-20】。「しゃげり」の拍子で行列を整え、「妙見拍子」「おかざき」の道行曲で鳥居の外まで下がり、休憩する。



2-8-17 参道



2-8-18 拝殿の後ろから巡行する奴



2-8-19 シナイの先端を井桁に組む拍子打ち



2-8-20 地面にシナイを打ち付ける拍子打ち

⑦拝殿前の踊り

休憩中、拝殿では本楽の際に「シカンマツリ」が行われる。試楽の休憩、本楽の「シカンマツリ」が終わると、再び行列を整えて、庭に進んで輪となる。本楽の拝殿前の踊りになると、拍子打ち勇壮活発に、シナイも折れよと庭を掃くので、シナイに括りつけている切り花のサクラの花などが飛び散り、役者の悪魔払いや大黒がシナイの下でかいぐぐってこれを拾う【2-8-21、22】。先と同様の踊りの後、打ち上げの拍子をもって掛踊が終わる。本楽の踊り納めとして「どじょ」の踊りが始まる。過去には母袋村（現大和町栗巣）の衆も加わって「場所なりの踊り」の掛け合いがあったといわれるが、現在は廃れている。これが終わって祭礼が終了する。



2-8-21 地面に打ち付けるシナイを避ける大黒



2-8-22 地面に落ちた花を奪い合う悪魔払いと大黒

2) 寒水掛踊保存会

保存会の結成は、昭和 37 年（1962）に掛踊が県重要無形民俗文化財に指定された折に結成された。現在は、6 代目の会長を中心に運営を行っている。保存会結成後も、掛踊の勤仕者は、古くは若者組を継承した青年団が行っていたため、村の顔役が務める名誉職としての性格が強かった。

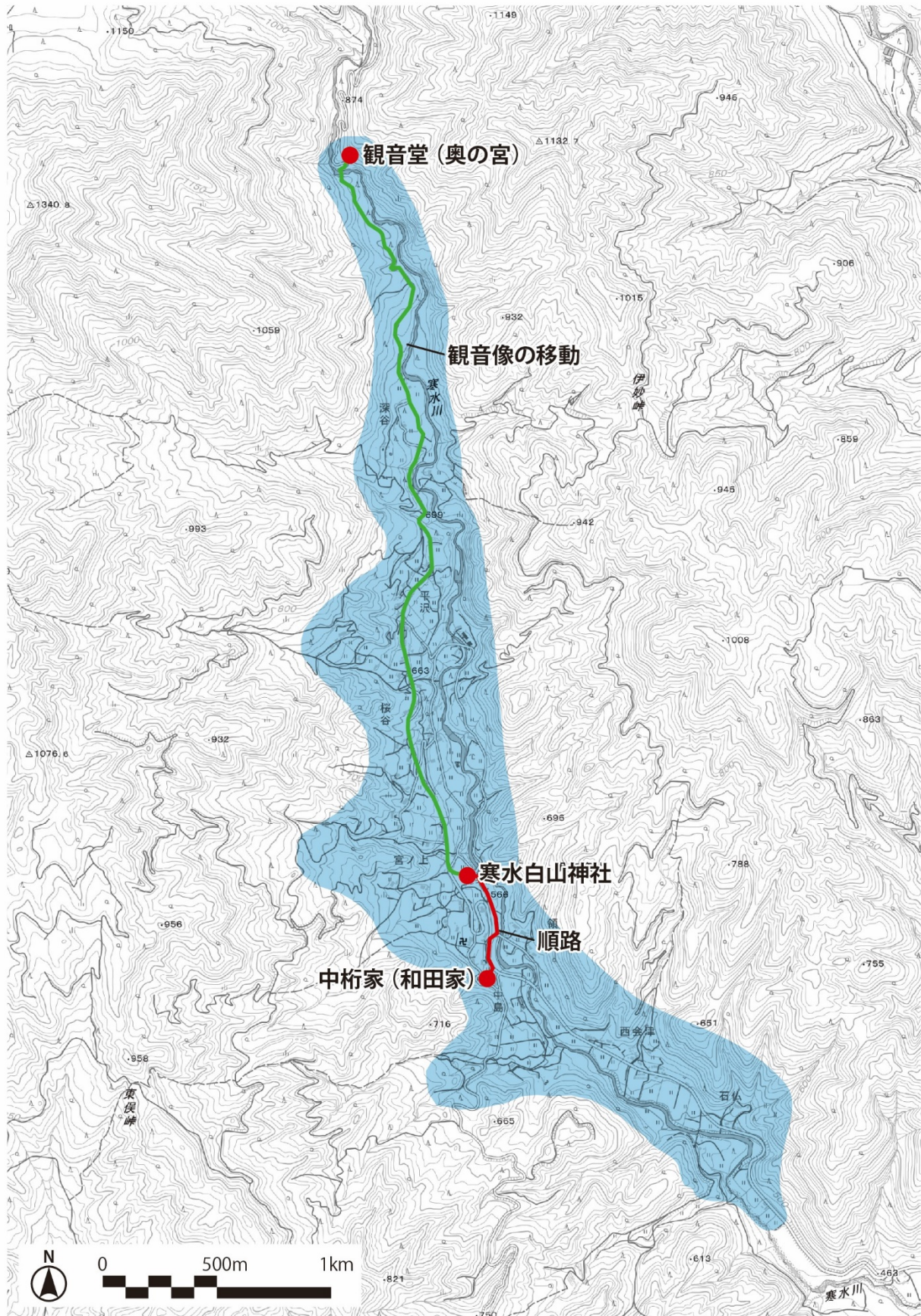
しかし、青年団活動の下火となると、青年団だけでは掛踊を含む祭礼の執行が難しくなってきた。このため、当時の保存会の 3 代目会長が、ほぼ一人で役者割から始まり、衣装の管理、稽古の立会などの掛踊の準備から片付けまでの一切を献身的に行ってきた。しかし、会長個人での執り行うことは事実上困難となり、平成 19 年（2007）前後に各班の保存会の役員が会長を補佐するなど、地域全体で掛踊を担う体制へと改めた。また、平成 19 年（2007）に規約を作成し、規約に基づき保存会の活動を行っている。役員は会長 1 名、副会長 2 名、会計 1 名、幹事 1 名、理事 12 名で組織し、適任者がいれば顧問を置くことになっている。役員任期は 2 年で、再任を妨げない。地区の役員改選の選挙の総会の後で、同じく選挙で決まる。なお、3 代目会長は、平成 23 年（2011）に会長を下りた後は同保存会の顧問を務め、またこれまでの取り組みが評価されて、令和 3 年（2021）に文化庁の地域文化功労者の表彰を受けた。現在は 6 代目会長が、コロナ禍のなかで活動の維持に尽力し、令和 4 年（2022）には寒水地区の人のみで掛踊の開催を実現させた。

保存会活動として、毎年 7 月下旬に準備を行い、当日の活動に向けての役者の割振りや衣装、道具の準備等を行う。衣装は、理事を通して各役者に届けられる。祭礼当日は、会長は行列に禰宜らとともに参加をし、祭礼終了後に衣装や道具の片づけを行う。

（４）おわりに

寒水掛踊保存会及び寒水自治会の献身的な取り組みによって行われる掛踊は、さまざまな役どころで構成され、130人ほどで行われる掛踊の一行は壮観である。

準備場所である伝承館から、さまざまな衣装や装飾を施された小道具に身につけた一行が、長い列をなして屋号中桁の和田家に向かう。屋号中桁の和田家の庭先で行う「中桁前の踊り」では、多くの役どころが集約し、祭礼の中心が集落の中の1点に集中する。その後、旧道へ出て、再び長い列をなして、800m先の白山神社へ向かう様子は、ぐるりと山で囲まれたのどかな山村集落をなかに、彩色豊かで、子供から大人までがさまざまな役に扮し、笛の音とともに進んでいく。寒水白山神社の鳥居を入り、階段を上がると拝殿前の広場で一行は輪を作り、拝殿前の「お庭踊り」や「拝殿前の踊り」となる。掛踊で印象的な3.6mのシナイを背負った拍子打ちのほかにも、さまざまな役が演じられている寒水の掛踊は、緑豊かな山と川に囲まれた田園風景のなかに位置する白山神社とともに歴史的風致を醸し出している。



地理院地図（国土地理院）に歴史的風致の範囲、要素を追記して作成

2-8-23 白山神社と寒水の掛踊にみる歴史的風致の範囲図

コラム 寒水踊り

初御神酒以降のお盆にかけて、寒水白山神社の拝殿で楽器演奏のない、歌と下駄音と手拍子で音頭をとる盆踊りが行われていたが、35年ほど前に踊られなくなった。その後は、地域づくりの一環として一般的な盆踊りが行われていた。

平成25年(2013)に地元有志により、「チョイナチョイナ」「寒水輪島」「どじょ」といった歌の歌詞の掘り起こしが行われ、数回の踊りの練習を経て、その年の8月10日に復活祭を行い、昔ながらの盆踊りが再び行われた。以降、毎年8月初旬に行われ、平成28年(2016)は、掛踊の試楽の夜にも祭礼の余興として実施されている。コロナ禍での一時期は踊ることができなかったが、令和4年(2022)に再開されている。令和5年(2023)は、お盆だけではなく、掛踊のユネスコ無形文化遺産の登録を記念して、試楽・本楽の日の夜にも行われた【2-8-24】。



2-8-24 拝殿での寒水踊り

コラム 奥美濃よもやま話

『奥美濃よもやま話』（全5巻、昭和46～51年（1971～1976））は、戦後すぐから長きにわたって、明宝地域で校長を勤められ、現在の明宝歴史民俗資料館の資料・収集・収蔵品の整理に尽力をされた金子貞二氏によって編纂された。この著書は、1960～70年代にかけて奥美濃、とりわけ明宝地域の人々に聞き書きをしたもので、全5巻にまとめられている。内容は、明治・大正・昭和期の日常生活から冠婚葬祭、そして戦争などのさまざまなことが収められている。ちなみに、寒水の掛踊や年中行事についての内容は第3巻と第5巻に収められている【2-9-25】。

現在、毎月第4火曜日に地元住民を中心に、明宝歴史民俗資料館にて「奥美濃よもやま話を読む会」による活動がある。文字通り、『奥美濃よもやま話』を実際に読みながら、当時の飲み物の再現や資料館収蔵の『よもやま話』に出てくる道具を鑑賞し、さまざまな話が飛び交っている。



2-8-25 奥美濃よもやま話（全5巻）

コラム つぎ汁

つぎ汁は、寒水地区の伝統食であり、唐辛子をから煎りし、風味を出してから、干椎茸などからとっただし汁と一緒に丁寧に煮出し、そこに水分が出て汁が薄まらないようにと小さく角切りにした地元のかたい豆腐を加え、醤油や砂糖で味を整えている【2-8-26】。

同地区の本光寺で、毎年10月に行われる報恩講（地元では「ほんこさま」と呼んでいる）のおとぎの際に参拝者に振る舞われる。報恩講以外にも、結婚式や葬儀が行われるときなど、人々が集まる特別な日に作る料理として伝えられている。地元の道の駅などで飲むことができる。なお、この料理は農林水産省の「うちの郷土料理」の郷土料理一覧に挙げられている。



2-8-26 つぎ汁